「自然に帰れ」とは
—ルソーの学説—

中島　巌

＜一＞

ルソーというと『人間不平等起源論』『エミール』『社会契約論』の著者であり、「自然に帰れ」と叫んで新しい時代を切り開いた思想家として一般に記憶されている。このモットーはルソーの名につきもののように、日本欧米のルソー研究書に出てくるのである。この言葉は確かに彼の思想の一端をはつきりと特徴づけている。しかしルソー自身が自分の思想をこのような定式に要約したのかどうかは少なくとも疑わしいのである。主著といわれるものの中には見られぬし、引用文に一つ一つ出典を明らかにしている丁寧な研究書にもこの表現だけには出典が示されていないのである。長年ルソーを研究されて近頃その成果の一端を公にされた新堀通也氏も「ルソー自身『自然に帰れ』という言葉は一度も使つていないようだ。」ともらしておられる。[1] それならルソー解釈者達の間でいつごろからその言葉が彼と並んで論ぜられるようになつたのか、それもまだ浅学の為に答えることが出来ない。しかし歴史的にみていいうることは、18世紀後半において自然に帰れというモットーで表現されるような気分は精神界の一方に広がつていたので、もしルソーがそうしたことを叫んだとしてもそれは彼だけのものではない。[2] ドルバックの『自然組織論』の最後の章はディドロの筆になるものと云われるがその中で彼は自然を擬人化してそれに人間に対する熱烈な呼びかけをなさしめている。そこに「私のもとに、自然に帰れ」という言葉が出てくるのでそれはディドロのいいだしたものかも知れない。そして時代がたち18世紀フランスを代表する思想家としてのルソーの名が高くなるにつれて、一つの思潮を表明するモットーが彼

に帰せられるようになつたのかも知れない。がこゝではその由来を詳しく尋ねるのが私の主題ではない。一般にルソーのものとして受けとられているこの言葉がルソーの学説の裏づけを与えるとどのような意義を持つのか簡単ながら説明しようと思うのである。

＜二＞

自然に帰れという言葉からすぐに連想されることは人為的制度や慣習を否定して単純素朴な状態に戻れという観念であろう。事実ルソーの初期の論文を読むとその表面に現われた文化、制度の悪弊を突くやや社会を忌避している態度のために殊にそうした印象を受けないとも限らないのであつて、この為に第一論文『学問芸術論』が公になるとルソーは多くの論者から「徳を復興するためには文明を捨てて自然に原始時代に帰ればいいのか」とつめよられたのである。そこで本意の弁明に努めるルソーと彼等の間に激しい論戦が行われその間に理論家としてのルソーが鍛えられていつたのである。第二論文『不平等起源論』でも或る人にはこうした感じを与えたので、例えばヴォルテールはそれを読んで「私共を動物にしようとするためにこれほど才智を用いた人はかつてなかつた。その本を読むと四つ足で歩きたくなるようだ。」と皮肉つたものである。だがルソーの学説の根底に方法的なものであるが自然状態の観念が存するのは本当である。彼は『不平等起源論』で自然人の観念を把えるために現実の人間から社会で獲得した知識、傾向、欲望、感情を次第にはいでいつて、これこそ自然から出たままの人間というものを求めようとしたのである。そうして彼が認めたものといえば、肉体構造については全く我々と等しい、自己保存の本能たる自愛心と同胞の苦しみを見ることを嫌う傾向という二つの原理にもとずいて行動している動物であつたのである。これは全く人間という名に価いしない存在である。だが彼の中には何等邪悪な傾向が存しない。人を押しのけても第一人者になろうとか、飽くことなく富を追求するとか、名声を死ぬほど渇望するとかいつたことはないし詔いも劣等感も感じることがない。ただ生理的要求のままに食べたり寝たり動きまわつたり

しているのである。悪もないし善もないその状態を彼は邪悪で様々な悲惨な事態に巻き込まれている人間社会と引き較べ幾分の憧れを混えて丁寧に描き出すものだから、それを一読した人は未開人に帰れというような要請を看取するのである。しかしディドロの『ブウゲンヴィユ旅行補遺』[3)]で行われている原始人の讃美に較べれば彼の自然人の描写は厳しく非感傷的である。彼がそのように自然状態を描くについては、ホッブスやロックの説を批判するという深い理論的な意味もあつたのである。ルソーはホッブスに自然人が自然的社交本能を有しないという点で同意しつつも、自然状態においては万人の万人に対する戦争状態を現出するほど利己的情欲が発展して居らぬと批判し彼自身は、それが自己保存の配慮が他人の保存を害することの最も少ない状態であると語つたのである。ロックは自然状態を相互援助の平和的状態と規定したがルソーはその説にそれは自然人に彼等の持たぬ正義とか不正の観念や社会的感情を導入したことから来る帰結だと反論した。ルソーの自然人は他人に積極的な関心を抱かず四散し孤立状態のもとに暮していたが故に平和なのであつた。

＜ 三 ＞

しかしこう規定しただけでは前にも述べた通り野獣と変ることがないのだが、ルソーは人間には更に自由と発展能力という他の動物とは異なる特質を認めるのである。後者の発展能力というのは自然状態の人間が潜在的にしか持つていないさまざまの才能を発展させる能力のことでこの潜在能力のうちまず最初に発展しはじめるのが想像力であり、最も大切だが最も遅く発達するのが理性である。理性は本能の如く独りでに発展せず、自己保存に必要となるまでは潜在したままに止まると彼は考え、自然状態では人間に何も理性を使う必要がなく欲求を満たすには本能だけで十分であつたのだと主張したのである。このことは自然状態と理性とを分離しがたいものとしていた「自然と諸国民の法」の著者プフェンドルフ等の理論の根幹を襲う結果になつた。ルソーのいう発展能力は社会状態と密接に結びついたものであり、発展能力は個体の中にも種の中にも存するのであ

るが、いずれの場合でも社会性の発展にともなつてそれは人間の潜在能力を開花させていくのである。一面から見れば『不平等起源論』の第二部は種としての人間存在における発展能力を描き、エミールは個としての人間存在におけるそれを描いているといえる[4]。社会そのものはルソーによれば自然本能に基くものでなくて、発展能力に由来するものであり、個人は社会的環境に適応するために発展能力によつて潜在理性を育成していくのである。この観念は社会の本質に彼が発展的活動力、可塑性を認めていたことを示している。彼の社会変革への要請もこの認識の上に立つているのである。だが更にいうならば発展能力が言語に深い関連を持つていることを注目しなくてはならない。『不平等起源論』の第一部の相当の部分が言語問題に与えられていること、並にその著作とほぼ同時に『言語起源論』が執筆されたことはそれを暗示している。

＜四＞

以上がルソー学説の基礎的観念たる自然人の自愛心と発展能力のあらましである。自己保存本能からは社会は生まれないし、人間的特質は社会の裡でなければ伸長しないのである。そこで社会の進展を見るとルソーは純粋の自然状態と理想的社会状態を両極として二つの過渡的中間的状態を想定しているのが知られる。その第一が新生社会（ジシエテネツサント）と第二は戦争状態である。まず新生社会は原始社会でありおおむね平穏な状態が保たれている。がロックやプフェンドルフの主張していたように理性がよく情欲を制禦しえたが故に平和なのではなく、欲望が少なく情欲に悩まされることがまれであるためにそうなのである。ルソーは新生社会の状態を種としての人間が最も幸福であつた人類の黄金時代と讃美するのである。がその状態に止まつておられなかつた。冶金と農業の技術の進歩につれて所有の観念が普及するようになると戦争状態が現出するようになつたのである。その原因の一つは、私有制が広まるにつれて不平等が発展し、それと相応じて利己心が鋭敏に仂くようになつたからである。ルソーは自愛心と利己心を峻別し、利己心はその形成を社会内の不平等に負つているもので自然的なも

のではなく利己的衝動が起つてくるのは才能、地位、財産の不平等に刺戟されて人間が相互に比較をなし差別観を抱くようになつてから以後のことと論ずるのである。利己心は虚栄心や羨望や劣等感、他のものよりぬきん出たものになりたいという野心、話題とされるようなものになりたいという熱望等の様々の形で現われてくる。ともあれ戦争状態の段階にいたつて人間はあらゆる情欲に目覚めて、この感情にうながされて発展能力も全き開花に達するのである。それで発展能力のことを彼は人間の不幸の源泉であり、彼の明知と誤謬、徳と悪を世紀の流れの中に孵化させて、永い間には彼を自分自身と自然との暴君たらしめる能力であると[5]述べて、人間の本質的特性と看做しつつも決して楽観的な見方をしていない。むしろ『不平等起源論』の二部を見れば自然のままに止まつていれば幸福でいられたものをこの能力のおかげでこうした邪悪に満ちた状態になつたのだとそれに不満をもらしている所もあるのである。それなら「自然に帰れ」とは発展能力が人間に得させた文化制度を打ち毀してしまえという主張なのかというと決してそうではない。そのような誤解が彼の生前から、第一論文を発表したときから、起つてきていたことは前に述べた通りである。しかしそれは彼の肝心な点を見落している。ルソーはそうは云つても「人類は後戻りすることも、不幸にして獲得したものを棄てることも出来ない。[6]」「人間性は逆行しないのだ[7]」という認識を深く持つており、これも彼の思想の中で大きい比重を持つているのである。

＜ 五 ＞

そこで簡明にいえばルソーが「自然に帰れ」と叫ぶならばそれは「人間は邪悪である」が「人間性は本来善である[8]」という根本思想に立脚しての言葉である。彼によると悪は社会的不平等に起源のある利己心に多く由来し、人間の邪悪さは原罪の如きものとして生来的にあるのではない。悪しき傾向は人間が社会において身につけた習癖なのである。これは『不平等起源論』の根本主張の一つであるが『エミール』でも「人間の心の中に最初から邪悪というものはない。如何にしてどこから入つて来たか

ということを説明の出来ない悪徳は一つもない[9]」と論じたのである。この原罪思想新固排撃の態度は『サヴォア司祭の信仰告白』の中で鮮明に表現されたがそのことの為に彼自身非常に信仰心の厚い人であつたにもかかわらず教会から厳しく迫害されたのであつた。「人間性は本来善である」それなのに社会における「人間は邪悪である」。そこから悪から身を守る為には社会から身を引いて超越して暮せばよいのかという問が出てくるのであるが、ルソーは生活の上で実際その当否を示した。『社会契約論』『エミール』を出版した1862年前後からルソーは田舎に隠遁して世捨人のような暮しぶりをしたが、強迫神経症に弄ばれる結果になつたのである。

しかしこれは彼の学説の帰結を示すものではない[10]。「自然に帰れ」ということがいえるためには「人間は自然的に善である」という確信がなければならないわけである。ところでルソーの学説の出発点の純粋の自然状態では何等の明知も持たないただ自己保存の自然的本能に従う善でも悪でもない自然人が存していたのである。確かにルソーは自然的本能をそれ自体としては善だと述べていたが、一方でそうした「善良さは人間的情欲の打撃を受けるやひとたまりもなく破壊され消滅されるであろう[11]」と警告していたのである。彼が迫害にも抗して守り抜いたその命題はもつと強力な根拠を持つているので、それを彼は体験の上から発見し、それを誇つたのである。それが彼の思想の中心にある。

＜六＞

ルソーの出世作『学問芸術論』は次のような言葉で結ばれている。「おお徳よ……汝の原則は万人の心のうちに刻まれているのではないか、そして汝の掟を学ぶには自己を省み情念を鎮めて良心の声に耳を傾けるだけで十分ではないのか、真の哲学はここに存する。われわれはこれをもつて満足することを知ろう」と。ルソーが「自然に帰れ」といえばこの意味においてなのである[12]。善でも悪でもない本能は発展能力によつて自然状態を脱出した人間においてはそのままでは悪に転化する可能性が出てくるのである。「本能を破壊する必要はないが、本能は規制されなくてはならな

い[13]」。そこで本能に代つて人間を規制するものが、しかも間接的でなく本能の如く常住して作用するものが人間には必要なのである。それが「良心の直接的原理[14]」なのである。もつともそれを偏見の所産と見るむきもあつた。しかしルソーは良心こそ人間存在の中心に位するものであるとはつきりその原理存在を断定したのである。そしてその頌歌を作つた。「良心、良心、神聖な本能よ、不滅な天の声よ、無知で有限な、聰明で自由な一存在の確乎たる指導者よ、善悪に関してあやまつことのない審判者よ、人間を神にも似せしめる者よ、汝こそ人間の本性の優秀性と人間の行為の道徳性を生みだす者だ。汝が存在しなければ、わたしは自分のうちに、禽獣の上にわたしを抜きんでさせる何物も感じない、ただ規律なき悟性と原理なき理性との助けをかりて、誤ちから誤ちへとさ迷う悲しい特権を感じるのみである[15]」と。もつとも良心の衝動に目覚めるのは青年期に達してからで「エミール」生徒も様々の欲情に眼が開かれるこの期に到つて良心の教育を受けるのである。しかし時を同じくして人間を邪悪にする利己心も次第に根深く形成されてくるので良心は自覚されても疎まれる傾向が出てくる恐れがある。更に社会環境如何によりこの悲劇的事情は深刻になる。それでルソーは次のように警告するのである。「良心の存在を知るだけでは足らない。それに従うすべを知らなくてはならない。それは自然の言葉で語るから我々は色々のことにかまけていると忘れてしまう。良心は臆病である。狂気が良心の声色を使い罪悪を命ずると良心は拒絶され尻ごみしてもはや我々に語りかけなくなる[16]」と。ここで彼のいう自愛心と良心の関係を見てみる。自然人の自愛心は発達すると受動的感性的存在と能動的知性的存在に分れるのである。前者は自己保存の肉体的本能に関しているが、「それだけでは人間は近寄るどころか分散する[17]」と説くのがルソーの立場である。一方後者は良心を中心にするものでこれによつて人間は社交的になりうるのだと論ずるのである。こうした彼の良心の観念は次の言葉によく出ている。「良心の衝動が生まれるのは自分自身とその同胞とに対する二重関係によつて作られた道徳的体系からである[18]」と。かくして自愛心

は愛と社交性に矛盾せざるものに高まるのである。

＜七＞

良心は善なるものを愛する自然的な感情であるが、この存在を肯定して人間の自然的善性の主張は根拠を得たわけであつた。しかし良心は盲目であつて何が善であるかは知らない。「人間は善について生得的な知識を持たない[19]」のである。そこで「理性が善を教える[20]」ことになる。「理性とは事物の本性並に事物と我々との関係にふさわしく我々の心のあらゆる機能を秩序づける能力」とルソーは定義しているが理性が活動し始めるのは良心と同時であり理性が明知を与えなければ能動的性格をもつ良心も十分には仂きえないのである。ルソーにあつては良心が感性に属するもの、理性が知性に属するものと明別されてはいるが、両者の一致した活動がなければ社会において効果的作業が為し遂げられないと考えられているのである。理性以外の如何なる権威も認めまいとする点でルソーは世紀の思想家達と同じであつた。しかし彼は「良心を抑圧してしまえば人間の中には情欲の幻想と利己心の暗示とに屈している堕落した理性しかありえない」と理性のみの強調に反対し、その感性的良心の指導を説いたのであつた。

人間は発展能力によつて自然状態から脱出したのであるが、そのおかげで本能による自動機械的な自然との協調が出来なくなつてしまつた。人間は自分で自己の世界を築いていかねばならぬ羽目に立たされることになつた。人間はその為に文化を作つたが良心と理性に一言で云えば人間の本性にその文化が適合しているとは限らない。人間はまず文化に適応するために、更に進んでは文化を改善するために常に努力が要請せられている存在である。こうした事情のために人間以外の動物にあつては怠惰が至極当然であつたにもかかわらず人間の場合には悪徳になつたのである。人間性は逆行しえない。生きるには進歩しなければならない。ルソーは進歩を指導するものとして万人の内に等しく祕められている良心と理性を発見した。しかし良心と理性に活動性が出て来る時は多くの情欲が眠醒める時でもある。かくして社会に善を実現するには大きな力が必要になる。そこに徳と

いう観念が生まれる。「徳という言葉は力を意味する、戦のない徳はなく、勝利なくしては徳もない」[21]。第一論文以来一貫したルソーの主張は社会の吹きこむ情欲に媚びる快適な才能より、まず社会の基礎をなしている徳を尊重せよということであり、自然に帰れという言葉もその意に解せられなくてはならない。

＜八＞

自然状態に退行して死滅せぬために人間には自由への道が開かれている。ところで自由というときルソーにおいては決して情欲の自由な満足が意味されていない。彼はよく「自由は法と共に現われ、又消滅する」[22]と語り、両者の観念の密接な関連を認めていたのである。むしろ自由とは個人が自らの上にたてた犯すべからざる法への服従なのである。だがその服従が他から強制されたものであれば法としての意義を失うのである。なぜなら法の解決を志向している根本的問題は「共同体の力によつて各人が全ての人と結合しながらも自分自身にしか服従せず、従前と同じように自由であること」[23]だからである。それで法に盲従するのではなく、自ら必要性を認めた上での同意が自由の基礎にある。そうした同意は「我々が法の意味を同化し、それが我々の意志の中に吸収しうるようなものであるとの理解に達した場合」[24]に可能となる。こうした法の観念は意志の根元にある能動的自愛心としての良心、意味を同化する明知を授ける理性を包含していることは明らかである。又こうした法にもとずいて政治をするにはそうした法の認識が出来る市民の教育が前提とされるのである。ルソーは文化を否定したのではなく人間の文化制度の最高のものとしての法を強調したのである。『政治経済論』では「法のおかげによつてのみ人間は正義と自由が得られるのだ。各市民に彼自身の判断の確率に従つて行動し、自分自身と矛盾した行動を取らぬようにさせるのはこの天の声である」と、口を極めて法が称揚されている。

ルソーの思想の基調については古来肝心な点で諸家の意見が別れているし、生気溢れた豊富な思想の濃淡は到底小論の及ぶ所ではないがここでは

ルソーの名と共に伝播されている「自然に帰れ」という言葉をきつかけにその一端を紹介してみたのである。自分としてはそれがルソーの良心、理性、法に対する信頼を表明するもののように感じられるのである。だとするとその言葉は極めて逆説的な意味を持つことになろう。純粋な文化への憧れを表明することになるのだから。しかし偉大な自然力を暗示するそのモットーは多少の疑惑があるにしろルソーのものとして捨て難い。良心、理性、法の真義については彼の宗教、教育、政治の学説を詳しく検討する必要があるが、ここでは主として、ライト、カッシラー、ドラテ[25]、の解釈を参照して示した。

註 1）堀新通也著「ルソー」西洋教育史　牧書店　p. 34 1957.
2）E. Cassirer The Question of Jean Jacques Rousseau p. 49. 1954.
3）Supprement au voyage de Bougainville.
4）R. Derathé Le Rationalism de J. J. Rousseau. 1948. I 参照
5）『不平等起源論』第一部
6）『不平等起源論』第二部
7）『ルソージャンシャクを裁く』第三の対話
8）『不平等起源論』註1参照
9）『エミール』第二篇
10）The Question of Jean Jacques Rousseau. II. p. 95. 参照
11）『エミール』第五篇
12）The Question of Jean Jacques Rousseau. p. 49. 参照
13）『エミール』第五篇
14）『エミール』第四篇「サヴォア司祭の信仰告白」
15）　同
16）　同
17）　同
18）　同
19）　同
20）　同
21）『フランキエール氏への手紙』
22）『山からの手紙』
23）『社会契約論』第一篇　第六章
24）「The Question of J. J. Rousseau」E. Cassirer p. 62. 参照

25) Ernst Hunter Wright; The Meaning of Rousseau. 1929. Oxford University Press.
Ernst Cassirer ; Das Problem Jean Jacques Rousseau 1932. The Question of J. J. Rousseau 1954. Translated by Peter Gay;
Robert Derathé Le Rationalisme de J. J. Rousseau. 1948. Press Universitaires de France.

（社会学研究科　坂田ゼミナール）